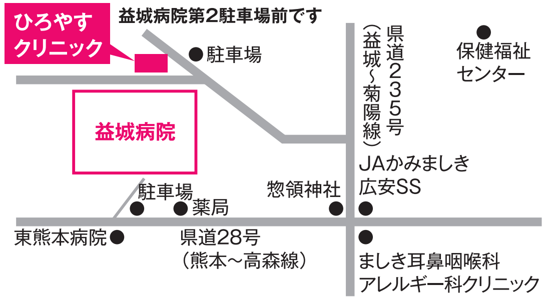
TOPICS 1 第6回院内学会 熊本地震を語り継ぐ～それぞれの場所で～

平成28年10月17日 第6回 院内学会を開催しました。今回は、「熊本地震を語り継ぐ」というテーマで、理事長、院長の講演をはじめとして職員がそれぞれの場所での体験を発表しました。

発表者
宮崎　翔・永田沙織・村添清美・坂田京子・小田泰徳・金子真弓・増田なみ子・園田　烈・高橋富陽・小松哉子

TOPICS 2 社会医療法人ましき会「ひろやすクリニック」1月5日、開院しました!



科目:内科・消化器科・循環器科
診療日:月曜～金曜
木曜日午後は第1、第3、第5週、
土曜日午前は第2、第4週のみの診療
住所:熊本県上益城郡益城町惣領1544番地3
TEL.096-286-3636
FAX.096-289-1688
http://www.mashiki.jp/care/hiroyasu.php

MASHIKI HOSPITAL
社会医療法人ましき会
益城病院

社会医療法人ましき会 益城病院
〒861-2233 熊本県上益城郡益城町惣領1530
TEL.096-286-3611　FAX.096-286-8145
外来お電話受付時間（月曜～金曜）
午前:9:00～12:00　午後:13:30～17:00
益城病院 検索

表紙タイトル:Reborn（リボーン） 新しく生まれ変わること。再生。

デザイン:吉本清隆デザイン事務所 取材・編集:堀地久美子 撮影:水野ヒロシ

Reborn

MASHIKI HOSPITAL
社会医療法人ましき会
益城病院

バラの名前は「楽園（英名:Rakuen」

今年こそは笑顔

理事長
犬飼 邦明

震災で多くのものを無くしましたが、笑顔もその中の一つでした。最近ようやく、職員や患者さんの笑顔につられて頬が緩むのを実感できるようになりました。周りを見渡すと、いくつもの素敵な笑顔に接することができます。

実は被災前の一年間、笑顔コンテストという企画を行っていました。プロのカメラマンに入っていただき、患者さんの一番よい笑顔をカメラに納めておこうというものですが、これが、職員自身に笑顔がないと、なかなかむずかしいものです。

福岡市の地下鉄工事現場で路面に大きな陥没ができました。あれほど大きな穴が急にできたとは考えられませんので、見えないところで少しずつ地盤がえぐり取られていたのでしょう。自分の周りを見渡しても危なそうな陥没や裂け目があり、地中奥深くで得体の知れない動きがあっているのかも知れません。そういえばついつい背を丸め、足許を見ながら歩いてしまう癖がついていたようで、その結果、顔が上がらなくなって、目の前の笑顔に気づかない自分になっていたのかもしれません。

笑顔ほど手軽で安上がりな潤滑剤はありません。今年こそは背筋を伸ばして笑顔をふりまきたいと願っております。

なかなか回復は進みませんが、それなりに順調です

〈寄 稿〉
院長
松永 哲夫

東北大学精神科の松本和紀准教授は、災害直後に宮城県DPATとして熊本に駆けつけていただいた先生ですが、その先生が「災害後の回復においては、（回復が）順調に行く群と遅延する群に格差が生じる。そこでは社会的サポート(SS:Social Support)が重要な要因で、SSをreceive（物理的に受け取る）ことよりも、perceive（感覚的に受け入れる）ことが大事」と話されました。

誤解を恐れずに思い切って平易な表現にすれば、「具体的に物質的に何を支援してもらったか」というよりも、「支援してもらって『嬉しいな』、『良かったな』などと感じることが回復に重要」ということと思われます。同じような物的支援を受けていても「支援がない。早くどうにかして」と不平を言う方もいますが、一方では、「おかげで本当に助かります」と御礼を言われる方もいます。同じ仮設住宅に移っても「ここの仮設は…」と口を尖らせる方もいますが、「ここに入れて幸せです」と喜ばれる方もいます。このような差は、物理的なSSと感覚的なSSの違いかと思われます。

作家の池沢夏樹は、「主観的な体験談こそが回復に役に立つ」と言います。そのような体験談を話したり聴いたりする場が重要と思われます。被災者も主観的、感覚的な体験談を話したり、他者の体験談を聴いたり、そしてそのような場をつくっていくことが回復に重要と思われます。当院が益城町の仮設住宅で始めている「いきいきカフェ」活動には、そのような意味があると思われます。

日常を取り戻す作業の先に見えた光

〈寄 稿〉
看護部長
水田 由紀

病院の被災に伴う入院患者不在の中で、復旧作業に明け暮れる毎日は、看護・介護職として自分たちの存在意義を探す毎日でもありました。そんな中、本部方針の周知や、所属長を中心とした所属感の維持は、膨れあがる不安へブレーキをかけてくれました。沢山の外部からの支援者にも背中を押して頂きました。

ふり返れば、外来・訪問看護は、直後から再開し、その後、段階的に病棟を復旧させ、9月1日から4つの病棟全部が使用できるようになり、診療機能すべてが回復しました。被害の甚大さを考えれば、驚異的です。

熊本地震は、「立ち直るのは不可能」と、思えるくらいの大きな出来事でしたが、「“日常を取り戻す作業”でいいんですよ」と、言ってくださった方の言葉を思い出しながら、昨年までの日々に近づける作業をしてきました。10月には、『院内学会』を開催しました。地震からの回復過程での現場力がよく見えた発表会になり、改めて、「益城病院のスタッフはすごい!」と思い知った瞬間でした。

新たな年を迎えて、内科クリニックが開院しました。精神科の枠を超えて、広がっていくことにワクワクします。看護部として積み残した課題や、地域貢献のために何ができるかの検討を重ねていきたいと考えています。

被災地の大変な思いを共有し、支え合うための「いきいきカフェ」

認知症デイケア 副長･在宅診療部 作業療法士
堀 光代

昨年9月に発足した認知症サポーターによる見守り体制事業「オレンジサロン」の一環として、在宅診療部の高齢者支援チームが、地域と連携しながら行っているカフェ活動。院内では毎週火曜日、看護師や精神保健福祉士、通院患者さんが一緒にカフェを開いています。また、パン工房「まりも」と4か所の仮設住宅を回り、市の後、下砥川、福富の3か所では、被災地の公民館や民家の庭を借りて「いきいきカフェ」を運営しています。地域の人たちがお茶やコーヒーを飲みながら笑顔を取り戻し、おしゃべりや様々な相談ができる場となっており、「久しぶりに人と会えた」「ゆっくり話せて楽しかった」といった喜びの声も聞かれます。

木山地区市の後では、地震前に120軒以上あった家がほとんど全壊し、残ったのはわずか十数軒です。ここに残って住んでいる人たちは、今も暗く寂しい夜を過ごしているといいます。震災からの復興は進んでいますが、被災者間の交流は乏しくなっているのが現実です。そんな中、社会から取り残され孤独に陥る人がないよう寄り添うことが、このカフェの目的です。

私は熊本市在住ですが、地震の後、益城町の方々と「生きとったね?」と声を掛け合ったあの日から、“自分は益城の人間だ”という思いが強くなりました。病院から外に出て地域の人たちのそばに行くことで力になれることが見つかり、少しでも被災地の方々が元気になれるようお手伝いできることにやりがいを感じています。

民生委員の木下たつみさんが快く提供してくださった庭にテントを張って設えたカフェ。三々五々集まった木山地区の人たちの顔が、おでんの湯気にほころびます（右から2番目が堀副長）

復活した「クリスマスバイキング」
これからも食べる喜びを届けたい!

栄養管理科科長
井上 さとみ

　昨年4月14の熊本地震の前震で、厨房は使えなくなりました。ひっきりなしに来る強い余震の中、「明日の朝食を何とかしなくては」と、非常食が備蓄されている管理棟の3階へ向かった時の恐怖は今も忘れられません。壁や天井が落ちた階段を上り、ドアをこじ開けて1日分の食糧を確保しました。

4月15日、炊き出しをする栄養管理科スタッフ

給水槽に残った水を大鍋やバケツに貯め、ガスボンベを集めてどうにか朝昼晩の食事を賄い、クタクタに疲れた状態で帰宅した16日未明に、さらなる激震。それから厨房が使えるようになるまで2か月かかりました。毎日、ただ必死で支援物資の仕分けや炊き出しをしながら、一日一日を乗り越えてきたように思います。

　震災から約8か月。春の「おひな様バイキング」を最後に中断していたランチバイキングが、ようやく昨年の12月15日に復活しました。平成7年、病院のリニューアルに伴って始まったバイキングは、当時、他には例のない先進的な取り組みでした。「食べる喜びを届けたい」という栄養科スタッフの思いを込め、これまで年4回、季節ごとに実施し、いつも皆さんに大好評でした。患者さん、職員、そして栄養管理科の全員が待ちに待った「クリスマスバイキング」。ようやく日常を取り戻したみんなの笑顔を見ながら、食の大切さをあらためて実感しました。これからもスタッフ一丸となって楽しいアイデアを出し合い、さらにレベルアップしていきたいと思います。

(上)栄養管理科スタッフと井上科長

「岡山県精神科医療センター」＆
「あさかホスピタル」病院見学、
お世話になりました！

熊本地震被災直後、益城病院に約2ヶ月という長期的な支援として、医師、看護師をはじめ多くのコ・メディカルを派遣していただいた「岡山県精神科医療センター」と福島県の「あさかホスピタル」へ、病院見学を実施しました。

どちらの病院もトップのリーダーシップが素晴らしく、職員が物事を自律的に考えて行動する姿勢に組織力の高さを感じました。震災の教訓が生かされ、防災への取り組み体制、復興支援体制の整備も充実していました。

大勢で押しかけたにもかかわらず、快く見学の受け入れをしていただきました。懇切丁寧な説明や資料の提供に感謝いたします。また、見学で学び得たことを、これからの益城病院復興に生かしていきます。

岡山県の精神科医療の中核を成す拠点病院であり、ソフト面・ハード面共に様々な工夫が取り入れられている「岡山県精神科医療センター」。（上）病院正門にて（下）病棟に面した空中庭園で説明を受ける様子
（見学日9月30日／参加者18名）

医療・福祉・介護の幅広い連携により患者支援体制が充実している「あさかホスピタル」。（上）あさかホスピタル会議室にて（下）あさかホスピタルが運営するレストラン「ボーノボーノ」
（見学日11月17日／参加者11名）

We are the one.

笑顔はそれぞれ、心はひとつ

熊本地震を越えて、益城病院スタッフは今。

給排水は9割方復旧しましたが、まだ建物の修理や防水工事など、やるべき事は山積しています。目の前の事を一つずつ片付けながら、明るい一年にしていきます（村上）

（左から）総務課施設係 岡野俊博、村上嘉浩、
（主任）村上誠一

他人事だと思っていた震災を経験し、防災意識に目覚めました。つらい日々でしたが、患者さんを支えるだけでなく時には反対に励まされました。一対一の人間としてふれ合えたことが嬉しいです。

外来准看護師
江邑由香里

まだ地震の傷跡はたくさん残っていますが、後ろを振り返らず、今、自分の目の前にあるものを大切にしたいと思います。今年は住む家も新しくなり、落ち着いて暮らせる年にしたいです（芦原）

（左から）橘病棟看護師 篠原光代、
3病棟看護師 芦原正和

地震の時は、患者さんと職員の垣根を超えたまとまりに感動しました。避難所暮らしをしながら、通勤先もまた被災地という大変さがありましたが、色々な事を学ばせてもらいました（鴨池）

橘病棟准看護師 鴨池賢宏、
橘病棟看護助手 舛田秀仙

まだ不自由な中で仕事をしていますが、自分たちの気持ちは患者さんにも伝わるので、今年は心にゆとりのある一年にしようと思います（福島）

（左から）1病棟准看護師 徳永祐子、介護福祉士 福島沙緒里
（中央）グループホームふるさと准看護師 今川裕

地震からの復興が進み、普通に仕事ができる日常がやっと戻ってきました。その間、益城病院が力強く前進してきたことに、とても勇気をもらいました。私も夢を見出しながら、前に進んでいきます。

3病棟准看護師
兼瀬 稔